
モドキイズム

幸坂師宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モドキイズム

【Nコード】

N6342N

【作者名】

幸坂師宣

【あらすじ】

最近彩色の行程を背景担当に斡旋されるようになってしまった昨今、如何お過ごしだろうか。僕はというと靴の踵くらいの必要性を保ちつつ、日々「自身の埋没」という名の邁進に精を出している。どちらかと言えば「後ろ向きな撤退」という方が事実の輪郭をなぞるのには適した表現かもしれないが、さておき。

立ち幅跳びの自己最高記録程度の取るに足らない半径の僕の日常に客観的非日常が身投げしてきたのはつい最近の話。伝えるべき相手である親方のいない僕の目の前で、空から降ってきた女の子は額

にこびりついた脳漿を拭いながら「吸血鬼」だと名乗った

モドキ共のモドキ共によるモドキ共のための魑魅魍魎百鬼夜行鳥
獣戯画跳梁跋扈の青春ストーリーモドキ、開幕。

序章（前書き）

はれ【晴／×霽れ】

1・空の晴れること。天氣がよいこと。氣象庁では、雲量が2～8、視程が1キロ以上の状態の天氣をいう。「雨のち」

2・表立って晴れやかなこと。おおやけのこと。また、そのような場所。「の席に臨む」「の舞台」褻け

3・疑いが消えること。「の身となる」

4・晴れ着。また、それを着た姿。「たった三度しきやあおを
しねえときて居るから」滑・浮世床・初

序章

『ハレ研』について、少し話しておこうと思う。
ながつきがわら

長月河原北高等学校の校舎は南側を下にして上空から俯瞰すると丁度逆さにした「生」の字の様な形をしており、四画目西側に当たる新体育館から反対側に伸びる長い渡り廊下を通って辿り着く一画目
そこが旧校舎、通称“部室棟”である。

どっかの教室の天井裏に三世帯暮らしのネズミ一家とかいそうな四階建ての木製の校舎は、近年耐震性の問題が指摘されたものの役所から十分な建て替えの予算が降りず、結果応急処置として不格好なX字型の鉄筋の補強材が取り付けられている。

放送局や一部の室内運動部を除く殆どの部局が嘗て使われていた教室を“部室”として占有する中、僕の所属する『ハレ研』も御多分に漏れず、三階一番奥に位置する三年十組の教室で風呂場の壁の隅にしぶとく息づく黒黴の如くひっそりと活動していた。数年前に進学科が潰れて以降、現在に至るまで一学年六組体制を維持してきた我が校だが、旧校舎には当時の名残が一フロアにつき九クラス分の教室とその他大小教室が三つ前後ずつ、伽藍がらんとした空虚な佇まいを晒している。当時の部局間における壮絶な場所取り合戦の残滓がそのまま使用教室の配置に反映され、不可視のヒエラルキーが君臨していることを鑑みれば、『ハレ研』が食物連鎖ピラミッドで言うところの最下段の植物を通り越して欄外の微生物とか日光くらいの弱小同好会であることは想像に難くないだろう。因みに今年度の部員数は僕も含めたった二名である。

そういえば九クラスあってなぜ三階のみ一番奥が十組なのかは、誰も話題にはしないが謎だ。教室名を示すプレートも四組から十組手前まで破損したか盗難被害にあったかで、今では何組が漂流教室

の憂き目にあつたのか知ることままならない。

『ハレ研』の起源について知り得る者は誰もいない

寧ろ知ろうとする者がいないという方が、より事実を表すのに則した適切な表現と言えるだろう。どちらにしろ、知ろうにも徒労に終わることは目に見えていた。

三年十組の教室は部室としての機能を果たす以前に物置と化していたのだ。処分に困つたらしき古めかしい柱時計やら薄汚れた飾り棚やら、その他どこから持ってきたのか甚だ疑問を禁じ得ないような粗大ゴミの類が雑然と置かれ、のみならず校則違反の品々の隠し場所としても利用されており、昔の生徒達の置き土産が所狭しと溢れかえる骨董品店の様な奇妙な雰囲気醸し出していた。そこへきて今年度に至るまでの先人たちの私物や膨大な量の書物がろくに整理もされずに投棄されているのだから、起源を示唆する品の入手など期待するだけ無駄である。ゴミ屋敷で自転車の鍵を探し出してこいというのに等しい。

ともあれ、起源など知らずとも活動内容さえ分かっていたれば所属するに当たって何の問題も無い。

活動内容に関しては、読んで字の如しである。『ハレ研』、つまり『ハレ研究会』だ。何の捻り^{ひね}も捩り^{もじ}も種も仕掛けも無い。『ハレ』という名前から『気象研究会』の一種かと勘違いする人がいるかもしれない（というか大半がそう思うだろう）が、『ハレ』とは『ハレ』の舞台^{オカルティック}とか『ハレ』着^{ハレ}とか、あのおめでたいときに使う『ハレ』である。天候を表す『晴れ』と言うよりは、『日常』を意味する『ケ』の対義語という意味合いが強い。

つまり、『非日常研究会』。

ここでの『非日常^{ハレ}』という言葉は大衆的に知られている概念よりはいくらか多岐に渡る意味を包括している。無論、超自然的な分野も多分に含まれるのだが、寧ろそこから地続きである儀礼や祭事、年中行事やそれに伴う特殊な衣食住、振る舞い、言葉遣い等、日常生活から画然と区別された文化を研究するのが本研究会の意義であ

る。より一般的な『オカルト研究会』と一線を描くのはこの性質によるものが大きい。

……と、必要以上に格好つけた形容を盛り込んだところで、突き詰めてみれば単なる『民俗学研究部』であり、昨今の神経過敏自意識過剰繊細無比なる高校生諸氏の注意を引くにはいささか彩度に欠ける。まあ、総じて部活というものは趣味の延長線上に位置して然るべきものなのだろうから、こんな数奇者すきものの集まりも一つか二つくらいあっていいのかもしれない。少数決ゲームにおいて無敗を誇る猛者が集う梁山泊のようなものだと思います。

『ハレ研』の意義については上述した通りだが、では具体的に日々どんな活動をしているのかというと、部活動としては実は何もしていない。部員数二名の部における結束などたかが知れている。

よって、必然的に個人での活動という放任主義。

事が起こったのは無意識下で発せられる鬱屈した溜息のような秋風が吹き荒ぶ

なんてこともない、爪で引っ掻いたらそのままぼろぼろと剥がれ落ちそうなほど乾き切った、情景描写の修辞をことごとく削ぎ落としたような十月六日の午後だった、と思う。その日も僕は他者の意志の介在しない放課後を過ごすことを余儀なくされていた。

まあ、こちらの方が気楽でいい。意識の射程距離に一人分の吐息しか内包されない状況を愛するようになったのは、両腕の半径、中指の先ぎりぎりにもで遠ざかったくらいの過去の頃からである。

不必要に脳の要領を食い潰すそいつを手っ取り早くクリンナップしたい衝動に度々駆られるが、二三本線のブチ切れた感性が辛うじ

てそれを黙殺した。わざわざ腕を伸ばして触れたいとも思わない。

時計の長針が短針と二度目の一二〇度を為すくらいのこの時間帯、僕は太抵図書室の深奥で長年手垢とは無縁そうだった民俗学研究を扱った本を読み漁るのが日課になっていた。

一般教室六つ分くらいの面積を持つ我が校の図書室は四階、先刻の説明に則って言うならば二画目の書き終わりの点に位置し、入り口から向かって左側四分の一が自習スペース、残りが県内の高校において最も最大の蔵書数を誇ると言われている架蔵スペースとなっていた。太抵僕が用があるのは左隅の入り口から対角線上の、半分書棚に埋もれかけているようなコーナーである。

埃の匂いが立ちこめる、知識に塗り固められたようなこの空間を僕は密かに気に入っていた。よほどの物好きでなければこんな辺境に足を踏み入れることはまず無いだろうし、大半の面積を書棚の背面に奪われた北向きの細長い窓から覗く景色も良かった。

几帳面に揃えられた大小薄厚色相様々な背表紙に視線を這わせ、目に留まった紺色のハードカバーの本を一冊抜き取った。『迷信の解剖』と題されたその背表紙の固さを指先で確認し、巻末の図書カードに書かれた名前は精々二人かな、と推測する。

思った通り、神経質そうな筆跡で書かれた一人分の名前だけが二十年ほど前の日付と共に刻まれている以外は、黄ばんだ余白がこちらを無表情に睨み返しているだけだった。「黄」ばんでいるのに余「白」とはこれ如何に、というどうでもいい思考は無辺世界に放っておく。

「二年八組十六番／双重坂貴尋」氏の知識探求の跡を追う趣で、僕は厳めしい旧字体がぎっしりとひしめき合うページをめくり始めた（特に何らかの伏線というわけでもないのに、氏の珍妙な名前に関しては忘れて貰って構わないことをここに明記しておく）。

あとは普段通り、司書が閉館放送をかけるまで視覚情報から成る知識の渦に身を委ねることに没頭し、独りで歩くのが当たり前になった帰路につくだけだった。

……ところで「日常」「非日常」という二元論的な言葉で表されることがからも分かるように、僕らが目下研究対象とするところの「非日常」は往々にして「日常」との明確な線引きが為されていると錯覚されがちだが、それは「日常」に慣れきった者の安直な偏見に過ぎない。それを「日常」か「非日常」か区別しているのは人間の主観が為す恐ろしく曖昧な意味付けのみであり、詰まるところ両者の境界線はグラデーションのようにぼんやりとしているのだ。気付けばあちら側、というのが現実である。

自分が今まさに迂闊にも日常のボーダーラインに片足を突っ込みかけているということに気づけないほど、安寧とした日常の中で腐りきった僕の神経もまた、愚劣極まるものだった。

何が気になったのか、僕はその時気紛れに顔を上げてしまったのだ。

窓越しに逆様の彼女と目があつたのは、その時だった。
さかさま

僕の価値観に他者のそれと余程の齟齬が見られなければ間違いないく「美少女」と形容して差し支えない容貌の持ち主だった。外見年齢は僕とそう変わらない。抜けるように白い肌は不健康さよりも先に透き通るような静謐さ、儚さを感じさせ、それが西日の橙色の光

の中に燐光の如くぼんやりと浮かび上がる様は壮麗の一言に尽きた。肘の辺りまで伸びた艶やかな黒髪と、身に纏っている薄地のブラウスが風圧ではためいている。長い上品な睫毛の奥の鏡のような瞳が、僕自身の姿を映して何の光も宿していないのを僕ははつきりと見た。透明な無機物一枚隔てた上下反転の邂逅は重力加速度に引き離され、僅か一秒にも満たずに終わりを告げた。

さらに数秒後、「どん」、もしくは聞きようによっては「どちゃ」という鈍い音が、遙か下からくぐもった脆弱な空気の振動となって僕の鼓膜を揺らす。

数秒のタイムラグの後、「のーてんからまつさかさまー」と心の中で呟きながら周囲を見渡してみたが、今の地上十二メートルでの一瞬のエンカウントに気付いた人物はいないようだった。

『迷信の解剖』を書棚に戻し、図書室を出て左のD階段から玄関に下りる。真下の美術室、職員室、校長室とその真向かいの会議室、いずれも騒ぎが起きている様子は無いのでみんな見てなかったのだな、と判断した。総じて非日常というのは滅多に起こらないのではなく、日々当たり前のように繰り返されているにも関わらず認識されることが殆ど無いだけである……………と他人の受け売りで思考の空白を濁してみた。さて、誰の談だったか。

断じて野次馬根性などではなく、純粹に唯一の目撃者としての責任感、正義感に基づいた行動である、と誰にともなく前置きしながら、僕は今し方の邂逅を果たした窓の真下、中庭の端に足を踏み入れた。

序章（後書き）

初っ端から意味不明な言い回し、回り諄い状況説明と徹底的に読者の客観を排した自慰作品ですね（笑）『幻影燈機』から入った方すみません、こっちが僕の素です。

さて、本作における「非日常」の定義というのは作中でも触れましたが、日本神道の考え方にもっともインスピレーションを受けています。

出産、経血、そして死、古来の日本人は今では日常的文化の一端として寛容に受け入れられている事柄に対し、ある時は人智を超越した尊いもの、ある時は触れることすら許されない穢れたもの、何れも「日常」から切り離されたものとして接してきています。

面白いのはそういった世界に対する見方が外面的な倫理だけでなく、若干の差異がありこそすれ、人間の内面、魂の本質等に関しても同じような見地で網羅されているということですね。言葉一つ一つの起源を辿ってみるのも面白い。そういった知識を自分なりに解釈（曲解という言い方もできますが……）し、試験的に再構成したらどうなるかというのが本作の意義です。

ここで言うようなことじゃないかもしれませんが、以前神道に関する作品を漫画媒体で描こうと試みたことがあるのですが、如何せん作者の画力が欠如していたために断念しました（笑）発想と設定は気に入っているの、今はまだ暖めています。本作執筆を通して得られたものが応用できたら……と考えています。

長々と綴って参りましたが、要はとにかくこんな作品でも付き合っていただけの読者様が一人でもいらっしゃれば、と言いたいわけです（脈絡ゼロ）。

ではでは今回はこの辺で……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6342n/>

モドキイズム

2010年12月7日14時03分発行